

## 察度王統と我如古大主——琉球王朝始祖伝説をめぐって——

原 田 信 之

(日本文学)

琉球の歴代王統は、神話時代にあたる天孫氏時代を除外すると、舜天王統以降、英祖王統、察度王統、第一尚氏王統、第二尚氏王統と続いた。これらの王統のうち、本稿では、察度王統の始祖である察度とその子孫をめぐる伝説を中心として扱った。在位時に多くの業績を残した察度も晩年には権勢におごる心が生じたというが、察度の世子武寧は父の死後即位してから日夜氣ままに遊び暮らし、尚思紹・尚巴志父子に滅ぼされたという。琉球の正史には、武寧に関して、隠遁後の足跡も没年も伝わっていないと記してあるが、興味深いことに、宜野湾市我如古地区には、武寧の子をめぐる伝説が伝えられている。土地の伝承では、「武寧王の三男」とされる「我如古大主」が我如古地区にやってきて我如古グスクを築城し、その築城の際のお祝いの踊りが「我如古スンサーミー」であったという。本稿は、新たに採集した口承資料などの検討を通して、察度王統の始祖察度の子孫をめぐる伝説の全体像をまとめ、残存資料の少ない琉球王朝始祖伝説の一側面を考察した。

### はじめに

『中山世鑑』（一六五〇年成立）や『中山世譜』（一七二五年成立）等の琉球の正史によれば、琉球の歴代王統は、神話時代にあたる天孫氏時代を除外すると、舜天王統以降、英祖王統、察度王統、第一尚氏王統、

第二尚氏王統と続いた。この琉球の歴代王統を日本本土の歴史と対照させると、舜天王統から第二尚氏王統前期まではほぼ日本の中世に相当し、第二尚氏王統後期は日本本土の近世に相当する。これらの王統図を略述すると次のようになる。

琉球歴代王統図（『中山世鑑』『中山世譜』等による）

○天孫氏時代

（二五代・一万七千八百二年間。歴代姓名不伝。） 一八六

○舜天王統（在位期間）

① ② ③

舜天——舜馬順熙——義本  
（一八七—二二七）（二二七—二四八）（二四九—二五九）

○英祖王統

① ② ③ ④ ⑤

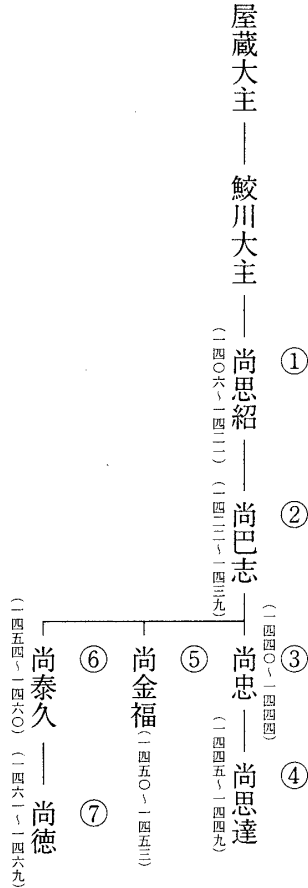
英祖——大成——英慈——玉城——西威  
（二六〇—二九九）（三〇〇—三〇八）（三〇九—三三三）（三三四—三三六）（三三七—三四九）

○察度王統

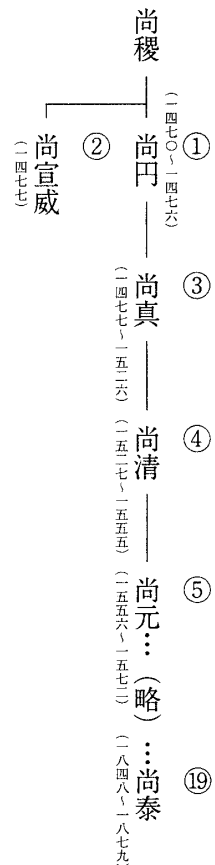
① ②

奥間大親——察度——武寧  
（一三五〇—三九五）（三九六—四〇五）

○第一尚氏王統



○第二尚氏王統



これらの王統のうち、本稿では、察度王統の始祖察度の子孫をめぐる伝説を中心として扱う。民間伝承の世界における始祖たちの有様は実に生き生きとしており、聞く者の心をとらえてやまない。文献資料からはうかがえない生々しい始祖たちの活躍の有様から、我々は、多くのことを学ぶことができる。これらの民間伝承資料は、史実と虚構の間にあり、資料的位置づけが極めて難しいため歴史的資料とみなすことはできないが、これらの民間伝承の背後には何らかの意味が隠されている可能性がある。しかし、これらの民間伝承は、いずれ消え去る運命にある。採集不可能となる前に、現時点での残存資料の総まとめをしておく必要がある。<sup>1)</sup>

察度王統は、初代察度（一三五〇—一三九五）と二代武寧（一三九六—一四〇五）のわずか二代で滅んだ。察度王統の始祖察度の生涯には、天人女房譚と炭焼長者譚という二つの昔話の話型が逸話として組み入れられて伝承されている。前稿で検討したように、天人女房譚は琉球王朝における神女組織の役割の問題と何らかの関係があるように考えられ、炭焼長者譚は察度の父の奥間大親が国頭奥間の出身で一族が代々鉄器を製造してきたらしい点と何らかの関係があるように考えられる。<sup>2)</sup>

また、察度とその子孫をめぐる伝説由来地の多くは、現在の沖縄県宜

野湾市に集中して存在している。例えば、祭度の父の奥間大親が天女と出会ったとされる「森の川」という泉川は宜野湾市真志喜にあり、祭度の住居跡とされる「黄金宮」は宜野湾市大謝名にあり、祭度の子孫と伝えられる我如古大主の住居跡とされる「我如古グスク」は宜野湾市我如古にある。宜野湾市は那覇市の北方約十キロに位置する沖縄本島中部西海岸の市で、西は東シナ海に面している。すでに人口三万人を越えていた昭和三十七年（一九六二）に市となり、平成十二年（二〇〇〇）には約八万六千人もの人口を抱える都市となっている。

本稿は、新たに採集した口承資料などの検討を通して、祭度王統の始祖祭度の子孫をめぐる伝説の全体像をまとめ、残存資料の少ない琉球王朝始祖伝説の一面を考察することを目的とする。

## 1 祭度と武寧

『中山世譜』によると、祭度は元の至治元年辛酉（一三三二）に降誕し、元の至正十年庚寅（一三五〇）に即位して、明の洪武二十八年乙亥（一三九五）十月五日に在位四十六年・寿七十五で薨去したという。祭度には一人の姉（名不伝）と一人の弟がいたといい、弟の泰期は「疑是異母之弟也」とされている。

奥間家（現在の佐喜真家）に伝わる『元祖之由来記』によると、奥間大親は天女と通婚して一男（祭度）一女をもうけ、天女飛去後、又吉親雲上の女子をめぐって三男一女をもうけたという。<sup>3)</sup>『元祖之由来記』の記述のどこまでが事実なのかは不明であるが、『中山世譜』のいう「一姉」と祭度が奥間大親と天女の子で、「一弟」泰期が奥間大親と後妻

（又吉親雲上の女子）との間に生まれた「三男一女」のうちの二男子とすることになる。

即位後の祭度は、以後約五百年におよぶ中国との関係の基を開き、留学生を明に送り、明より閩人三十六姓を迎え、宮古・八重山が入貢する等、多くの業績を残したが、晩年には権勢におごる心が生じてきたという。祭度の晩年の話として、『中山世鑑』に次のような逸話が記されている。

### 〈事例1〉『中山世鑑』巻二「祭度王」の項（末尾）

祭度王モ、後ニハ、驕奢ノ御心ヤ出来ケン。高ヨザウリトテ、数十丈ノ高楼ヲ作り、遊観ヲシ給ケルガ、或時、此楼ニ上リ、戲言ニ、常ニ此楼上ニ、居給程ナラバ、毒蛇ノ恐モ無物ヲ、トゾ宣ケル。ノ天道モ、彼奢ヲ懲給ケルニヤ、果シテ其夜、楼上ニテ、君ノ左ノ御手、毒蛇ノ為ニゾ、触タリケル。ノ其痕、次第ニ、ホトリリノボリテ、切レタリケルバ、アル近臣、申ケルハ、君トシテ、片手無テハ、如何デカ、朝覲会同ノ礼、且ハ天神地祇ノ祭礼ヲバ、遂行給ベキ。恐ナガラモ、手ヲ奉ントテ、吾手ヲ肱ヨリ搔落シ、君ノ御手ニ指合セ、療治ヲ致ケレバ、御手スナハチ継テケリ。ノ依テ、祭度王ノ左ノ御手ハ、色黒ク、毛生ジケリ。全体ノ肌ニハ替リタリ。不思議（議<sup>4</sup>）ナリシ事共也。

〈事例1〉は、権勢におごる心が生じてきた祭度王が高さ数十丈の高楼を作って遊観したが、ある時この楼上で左手を毒蛇にかまれたため、近臣が自分の手を切って王の手に継いだという話である。『中山世譜』では、この話は明の洪武二十五年（一三九二）のこととしている。この事件の三年後に祭度が亡くなっていることから、祭度王晩年の逸話であることがわかる。筆者が宜野湾市で祭度の調査をした際には、この逸話

を採集することはできなかった。「聖徳ノ人」(『中山世鑑』巻二)として人々から中山王に推挙され、青壮年期にあれほど賢明で多くの業績を残した人物であったにもかかわらず、晩年に権勢におごる心が生じてきて、「遊観」のために高さ数十丈の高楼を作ったというのやや奇妙な感じを受けるが、高楼上で左手を毒蛇にかまれ、近臣が自分の手を王の手に継いだという話はさらに異様である。この不自然さから逆に想像をたくましくすれば、高楼を作ったのは「遊観」のためではなく「戦略」であった可能性や(察度の時代は三山が勢力争いをしていた時期で、まもなく察度王統は滅ぼされた)、高楼上で左手を毒蛇にかまれたのは人為的なものだったか(暗殺未遂か)等々のことが考えられるが、あくまで推測にすぎず、事実是不明である。天女を母に持ち、大量の黄金を保有し、王に推挙され、他人の左手を継いで肌色が違う腕を持つ等、察度の生涯は異色の逸話に彩られている。これらの逸話は、察度の偉大さを反映したものとも考えられ、興味深いものがある。

察度が亡くなった後、世子の武寧が即位した。『中山世鑑』と『中山世譜』の武寧の項には、次のように記されている(傍線部筆者)。

〈事例2〉『中山世鑑』巻二「洪武二十九年丙子武寧王御即位」の項

武寧ハ、察度王ノ世子也。大元、至正十六年丙申ニ、御誕生。洪武六年癸丑、御歳十八ニテ、東宮ニ立給、四十一歳ニシテ踐祚アリ。ノ武寧王、立給テヨリ、父ノ遺(遺カ)命ニモ違キ、内色ニ荒ミ、外禽ニ荒ミ給テ、群臣ノ賢否ヲモ不<sub>レ</sub>弁、百姓ノ憂苦ヲモ不<sub>レ</sub>顧。只、日夜ニ逸遊ヲ事トシテ、前列ヲ地下ニ羞シメ、朝暮ニ奇物ヲ翫テ、傾廢ヲ生前ニ致ントス。見人眉ヲ顰メ、聞人唇ヲ翻ス。是ニ依テ、諸侯、背者多シ。ノ終ニ、山南王、義兵ヲ挙給ケレバ、中山王、拒戦ントシ給ヘバ、勢微ニシ

テ、難<sub>レ</sub>叶。一先ツ、落給ハントシ給ヘバ、四面皆、楚歌ス。跋<sub>レ</sub>前薨<sub>レ</sub>後、無<sub>三</sub>云甲斐<sub>一</sub>。在位二十六年ニシテ、永樂十九年辛丑、二月初五日ト申スニ、降参ヲゾシ給ケル。ノ去程ニ諸侯、大ニ会シテ、山南王ヲ尊ンデ、中山王トゾ仰奉<sub>ル</sub>。

〈事例3〉『中山世譜』巻三「武寧王」の項

神号、中之真物(童名不伝)ノ元、至正十六年丙申、降誕。ノ父、察度ノ母、勝連按司之女。(名号不伝)ノ妃、及世子、不<sub>レ</sub>伝。ノ紀ノ明、洪武二十九年丙子、即位。ノ(中略)ノ永樂四年丙戌。(略)本年。中山。為<sub>二</sub>佐敷按司巴志所<sub>レ</sub>滅。ノ先<sub>二</sub>是<sub>一</sub>武寧。荒淫無<sub>レ</sub>度。用非<sub>二</sub>其人<sub>一</sub>。諫者罪<sub>レ</sub>之。諛者悦<sub>レ</sub>之。壞<sub>二</sub>覆先君之典刑<sub>一</sub>。国人敢怨。而不<sub>二</sub>敢言<sub>一</sub>。ノ時佐敷按司巴志。繼<sub>二</sub>父治<sub>一</sub>民。進<sub>二</sub>賢士<sub>一</sub>。退<sub>二</sub>不肖<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>功者必賞。有<sub>レ</sub>罪者必罰。威名大振。遠近帰服。ノ是年。巴志。歳二十一。見<sub>二</sub>武寧驕奢無<sub>レ</sub>度、虐<sub>二</sub>民廢<sub>一</sub>政。卒起<sub>二</sub>義兵<sub>一</sub>。来問<sub>二</sub>其罪<sub>一</sub>。ノ武寧慌忙。催<sub>二</sub>軍拒禦<sub>一</sub>。奈諸按司。閉<sub>二</sub>戸高<sub>一</sub>枕。会莫<sub>二</sub>之救<sub>一</sub>。勢孤力弱。難<sub>二</sub>以扞禦<sub>一</sub>。悔<sub>レ</sub>之無<sub>レ</sub>及。ノ在位十年。歳五十。出<sub>二</sub>城伏<sub>一</sub>罪。ノ諸按司。奉<sub>二</sub>巴志之父思紹<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>君。(起<sub>二</sub>察度庚寅<sub>一</sub>。尽<sub>二</sub>武寧乙酉<sub>一</sub>。共<sub>二</sub>二王<sub>一</sub>。歴<sub>二</sub>五十五有六年<sub>一</sub>)ノ附<sub>二</sub>武寧謝罪遁隱<sub>一</sub>。至<sub>二</sub>今数百年<sub>一</sub>。寂然無<sub>レ</sub>跡。故薨<sub>レ</sub>寿不<sub>レ</sub>伝。

〈事例3〉の『中山世譜』によると、察度の世子武寧は、元の至正十六年丙申(一三五六)に降誕し、明の洪武二十九年丙子(一三九六)に即位して、明の永樂四年丙戌(一四〇六)に在位十年・歳五十の時に尚思紹・尚巴志父子に滅ぼされたという。〈事例2〉の『中山世鑑』には「在位二十六年ニシテ、永樂十九年辛丑、二月初五日ト申スニ、降参ヲゾシ給ケル。」とあるが、永樂十九年辛丑(一四二二)は察度王統を滅

はした尚思紹が亡くなった年であり、明らかな誤記である。琉球の正史においては、偉大な察度に比して、子の武寧はあまりにも無能であったように描かれている。武寧は父の死後即位してから、父の遺命にもそむき、臣下の賢愚もわきまえず、民衆の憂苦も顧みず、ただ日夜きままに遊び暮らした。そのため、尚思紹・尚巴志父子が義兵を挙げて滅ぼしたという。

#### 〈事例4〉「武寧王」

察度王は、その子（と）、二代しか（続かなかった）。武寧王、あれはまた、わがままでね、女遊びとか酒遊びとかふけてですね、またあの、尚巴志という方に討ち殺されたとか何とか。あまり、勝手なことやってね、武寧王は。あまり信用なかったという話ですが。武寧の話は、あまりないです。<sup>(7)</sup>

〈事例4〉は、宜野湾市真志喜で採集した話で、武寧王はわがままで女遊びや酒遊びにふけて尚巴志に討たれたという話である。歴史上無能であったように描かれている武寧は、伝承上かなり影が薄い。宜野湾市や浦添市での筆者の調査では、武寧の話をはとんど聞くことができなかった。

〈事例3〉の『中山世譜』巻三「武寧王」の項の末尾に「附」として、武寧が罪を謝して隠遁してから今に至るまで数百年たつが、その足跡もわからないため、何歳で亡くなったか伝わっていないと記してある点が注目される。永樂四年（一四〇六）に武寧が隠遁してから『中山世譜』（一二二五年成立）編纂時の「今」まで三百年以上経過しているわけであるが、その間、武寧の消息は不明のままであったようである。武寧をはじめ、察度王統の子孫はその後どうなったのであろうか。

察度王直系の子孫のことではないが、この問題に関し、真境名安興氏は「察度王の子孫／察度王の弟泰期の後裔は小禄にありて「カナマン御岳」「嶽」（同村）に奉祀せりと云ふことで、その子孫は左のやうで古文書に伝へてある。／崎山里之子／金城里之子／小禄親雲上／松川親雲上／安次嶺親雲上／赤嶺親雲上／内間大親雲上」と記している。ここの「古文書」が何を指すのか不明であるが、察度王の弟泰期の子孫が小禄にいるという記述である。

察度王直系の子孫の消息について、宜野湾市我如古に興味深い伝承が残っている。次に、宜野湾市我如古の事例を見てみることにしたい。

## II 我如古大主と我如古グスク

宜野湾間切十四か村の一つで、現在は宜野湾市の一地区となっている我如古（ガネコ、ガニク）には、かつて察度王統ゆかりの我如古大主（ガネコウースー、ガニクウフシユ）という人物が住んでいたという。また、我如古地区では我如古大主に由来するという「我如古スンサーミー」と称される踊りが古くから行われている。

「我如古」の語源について、東恩納寛惇氏は「方言ガニク、牧港川の上源に処る。ガニク又はカニクは砂浜の義なる故に、古へ湾入この附近に及びしなるべし。」と述べている。また、土地の伝承も紹介している『我如古区公民館落成記念誌』には「我如古の地名の由来もおもしろい。その昔、今の我如古前原あたりまで入り江だった。その砂浜にはカニが多く、我如古大主がこの地に配属された時、このカニの繁殖のすばらしさを見て、この地の子孫がいつまでもカニのごとく繁栄することを

願ってガニクと名付けたという。<sup>(10)</sup>と記してある。現在の我如古地区は住宅密集地となっており、地区の中央部を通行量の多い国道330号線が通っている。

# 「事例5」我如古大主について

この、我如古大主（ガネコウスー）といつてこつちに祭られているみたいよねえ。これもまた、うちなんかは戦前は、あるといつてわからなかったよ。戦争終わってから、実行委員の人、運営委員の人、その、人たちが、「我如古大主といつてあつちに祭られているから、あつちの拝みはしないといけないねえ」て。この我如古大主という人は、五百年前から、こつちの部落に、あるといつて話は聞いたけど。

この我如古大主という人は、五百年前から、こつちにいるいうて。それで、我如古の部落を守っていたかね。部落の人から何も話聞かないからね、私たちは。何かで話聞いている。わからんわけよ。我如古サンガチャーしてよ。この我如古サンガチャーはね、やらないと、みんな若い人が、死んでね、若者の人が、亡くなりよつたつて。だから五月にサンガチャーをやったことがあるようつて、聞いたからね。<sup>(11)</sup>

「事例5」は、我如古地区では五百年前から我如古大主という人が祭られているという伝承である。土地では我如古区南部（我如古区四丁目）の丘の上に我如古大主の城（グスク）があつたという伝承があり、その丘一帯は「我如古グスク遺跡」と呼ばれている。

この我如古グスク遺跡からは、「貝塚時代後期終末グスク時代初頭の土器が採集されている<sup>(12)</sup>」ということである。「事例5」の話者がよくわからないと述べているように、我如古地区で我如古大主の話を聞いても、どのような人物であつたかという詳しい話を聞くことはできなかった。

た。現在、我如古グスク周辺部は墓地になっており、丘の上の聖地の中心部に我如古大主の祠（碑）が建立されている。また、我如古大主の祠の北隣に拝泉の「グスクガー」があり、コンクリートブロックで四角の枠が作られ、枠の周囲もコンクリートが張られている。かつては祠の南側に根所である屋号新垣（アラカチ）の神墓もあつたというが、旧公民館の東の丘に移設したという。<sup>(13)</sup>

我如古大主の出自について、『宜野湾市史第五巻』は「口碑伝承によると、我如古大主は根所の屋号新垣の祖先で、中山王武寧の三男として生まれた。武寧王が南山佐敷按司との戦に敗れたのでその子である我如古大主は追われ、逃避した所が我如古部落であつたという。／その後、我如古大主は、この地に築城し、その時の祝宴に催した婦人達の踊りが、現在の「スンサーミー踊り」（ウスデーク）の始まりであるという。／はたして、この地に城があつたかどうか、あつたとしたらどの程度のものか、現在のところ伝承以外記録は見あたらない<sup>(14)</sup>。」とし、『我如古区公民館落成記念誌』は「我如古の発祥は約5、6百年に奥間大親と天女の孫にあたる武寧王の三男、我如古大主が移り住んでからできた、と伝えられている。我如古グスクは我如古大主の住居跡だという。」<sup>(15)</sup>とし、『ぎのわんの文化財「第六版」』は「我如古スンサーミー」の項で「伝承によると、察度王の三男の孫にあたる我如古大主が我如古グスクを築城した際、その祝宴で披露されたものが始まりとされます。」と記している（傍線部筆者）。つまり、我如古大主の出自としては、「武寧王の三男」説と、「察度王の三男の孫」説があることがわかる。筆者の調査では、「武寧王の三男」説を聞くことができたが、それ以外の「察度王の三男の孫」説等は聞くことができず、大半の方はよくわからないと

返答された。我如古大主とその出自について記された古文獻はなく、ただ土地に口承で伝えられた伝説があるのみのようである。

『中山世鑑』や『中山世譜』等によると、察度の子は武寧一人しか記されていない。このことから、「察度王の三男の孫」説は成立しにくいように思われる。一方の「武寧王の三男」説であるが、〈事例3〉で引用した『中山世譜』卷三「武寧王」の項に「妃、及世子、不<sub>レ</sub>伝」とあり、妃や世子の存在が不明であることから、逆に、世子が存在していた可能性が生じてくる。つまり、土地で伝承されてきたという「武寧王の三男」説と「察度王の三男の孫」説では、「武寧王の三男」説の方が説得力があることがわかる。ただし、あくまでも「可能性」があるだけで、文献的裏付けがあるわけではない点もおさえておく必要がある。しかし、武寧が尚思紹・尚巴志父子に滅ぼされ、罪を謝して隠遁してから数百年間その消息がわからないと琉球の正史『中山世譜』が記すその一方で、我如古地区では数百年間「武寧王の三男」我如古大主を祭ってきたというのは、大変興味深いものがある。しかも、『宜野湾市史第五卷』が記す伝承のとおり、武寧王が尚思紹・尚巴志父子に敗れてその子我如古大主が我如古に逃避してきたとするなら、明の永樂四年丙戌（一四〇六）頃に我如古に来たことになり、約六百年近くも昔のことになる。

### III 我如古スンサーミー

我如古地区では古くから「スンサーミー」と呼ばれる踊りが伝えられており、よく知られている。この踊りは数百年間伝承されて来たとき

れ、平成七年十二月二十七日に宜野湾市の無形民俗文化財に指定されている。

#### 〈事例6〉「スンサーミーの由来」

スンサーミーの由来は、我如古グスクが、築城するときの、ヒロインの祝いみたいな形で踊られたのがスンサーミーのはじまりと言われているんですよ。その時はスンサーミーと付いてたわけではなくて、たまたまお城ができる時の、お祝いの席で踊ったついでに言われてますね、はじまりは。

これ（我如古グスク）は、羽衣伝説の察度（の子の）、武寧王の三男（が造ったといわれている）。（スンサーミーの起源年代の説は）色々あるんですよ。三百年で書かれる場合もあるし、五百年で書かれる場合もあるし。けどもう定かじゃないんですよ。だから私たちも、本当はどっちなあつて感じ<sup>(17)</sup>で。

〈事例6〉は、スンサーミーは我如古グスク築城の際に、そのお祝いのために踊られたのがはじまりという由来譚である。スンサーミーの起源年代に関しては説が色々あり、三百年とも五百年とも書かれる場合があるが、定かではないということである。我如古大主が「武寧王の三男」だとしたら、武寧王が尚思紹・尚巴志父子に滅ぼされた明の永樂四年丙戌（一四〇六）以降で、我如古グスクが築城された頃からということになり、五百数十年前から続いているということになるが、古文獻がないためこれも実際の所は不明と言わざるを得ない。

#### 〈事例7〉「スンサーミーについて」

だいたい、十二、三頃から好きな人はこのスンサーミー、サングワチャーといって、これなる人、行きよったよね。好きな人がよ。今のよ

うにして、もうあの婦人、みんな出て、サングワチャーは、やることではなかったから。自分たちは、もう、十四歳頃から、スンサーミー、我如古サングワチャー、習いに行くねえつと言ったら、集まってサングワチャーやるつと言って、この、我如古の部落の大きいお家からね、このサングワチャーするから、このお家貸してくださいと言って、こっちに相談してから、こっちでやりよった。(中略)

昔は、我如古の人ばかり、結婚もしない人ら、十七、八の、若い若い人たちが(踊っていた)。その当時は、二十歳になったらね、自分たちは二十歳なったら、もう結婚遅くつてね。今の娘が四十代の、当時、だったはずよ。もう結婚、遅くなつて。自分はね、十九歳で結婚したから、十九歳までやったはずと思う。十四、五歳から十七、八歳まで。これはまたね、誰がやると決めてもないし。今年やって来年はやらない人もいるしね。好きな人が、

「何で皆三月三日サングチャー習いに来ないねえ」つと言ってね。「みんな集まって来なさい」と言って。呼んでからね、みんな恥ずかしがつてね、その当時は。やりよった。

わざわざね、サングチャー見に行こうつていつて、来なかったよ。道はね、あっちから道が通っていたから、このまんま道で見てね。<sup>18</sup>

〈事例7〉は昭和時代初期に「我如古スンサーミー」踊り(「サングチャー」とも呼ばれている)に参加した経験を持つ女性(大正五年生まれ)の語りである。戦前は未婚の女性しか踊りに参加できなかったというので、この女性は十四、五歳から十七、八歳頃までの未婚時代に参加したそうである。好きな人は十二、三歳頃から踊りに参加したという。我如古グスクの近くに、戦前は「我如古平松」と称された大きな平

松があり、そのまわりを回りながら午後三時頃から二、三時間踊ったという。幹まわりが四、五メートルもあったという「我如古平松」は名松として有名であったというが、今時の大戦で焼失してしまったというのである。踊りへの参加は自由意志だったようで、今年誰が参加すると決めていたこともなく、今年参加して来年は参加しない人もいたという。複数のお年寄りの方に話を聞いてみたところ、戦前のスンサーミーに参加した女性は比較的ゆとりのある家の娘さんが多かったようであった。また、好きな女性は積極的に参加して、楽しく踊ったという。戦前のスンサーミーでは、その時代時代で、踊りが好きなリーダー的な娘さんが中心となつて続けられて来たようである。また、踊りに男性は参加せず、あまり見物にも来なかったということであった。スンサーミーの練習に関して、『宜野湾市史第五巻』には「三月遊び(サングワチャシビ)は、スンサーミーと称し、女性だけの実行委員一〇人(十人筆者と呼んだ)がいて、練習の段取りを受け持った。部落の適当な家を借り、一ヶ月ほど練習し、本番に臨んだ。平松の遊び庭(アシビナー)と屋敷の広い所で踊を披露した。現在は、根屋といわれる屋号新垣と公民館広場で披露される。」と記されている。この記述からは、実行委員により厳格な練習の段取りが行われたように感じられるが、実際のところ昭和時代初期のスンサーミーは、〈事例7〉の話者の語りからうかがえるように、おおらかでゆつたりとした楽しいものであったようである。

スンサーミーが中止になったのは、明治の大飢饉の時と第二次世界大戦前後の混乱期(昭和十五年頃から昭和二十一年頃)のみであるという。戦後は昭和二十二、三年頃から再開されたということであるが、昭和四十五年頃からは都市化の影響で踊り手が減少したため既婚者も加わ



るようになり、現在は婦人会が中心となって踊っているということである。後継者不足の問題は、我如古地区でも例外ではないことがわかる。

# 「事例8」スンサーミーの拝みについて

現在は、我如古の旧暦の三月三日が、中心になっているんですよ。だけど、現在は、三月三日ということでは、やらなくて、日曜日を利用してやっていますね。その日は拝（うが）みだけ、三月三日は。旧暦の三月三日は、一応そういうふうなことで、やりますということで、拝みを入れますね、部落。もともとは、我如古のムートウヤー（元家）の、お爺ちゃんがいらして、そのお爺ちゃんのほうで、拝み入れてたんですけど、もう亡くなられて十年近くなるんですけど。それからですね、今拝みに出るのは自治会長が中心になって、やります。我如古の婦人会の、役員と。拝みに関しては。

我如古には色んな、サンガチャーから始まって、ウマチーとか、旧暦の六月、ありますよね。あとは、色々あったみたいなんですよ、四つ五つぐらい。そういう時にはだいたい、ムートウヤーの方が、先頭に立って、役員も含めて、（拝みを）やっていたらいいんですよ。<sup>(2)</sup>

「事例8」は、スンサーミーの拝みについての語りである。かつては旧暦の三月三日にスンサーミーの拝みと踊りが行われていたが、現在は旧暦の三月三日は拝みだけ行い、踊りは日曜日を利用して行われているということである。『我如古区公民館落成記念誌』に「スンサーミーの歴史は古い。約5百年前、我如古大王が築城した時、その祝宴に披露したのが始まり。それ以来、豊年、子孫繁昌を願い、毎年旧歴（暦）8月17日に催されていた。尚巴志時代までは牛の皮で作った太鼓が主な伴奏だった。その後、三味線を伴奏に取り入れるようになってから、我如

古平松の下で旧歴（暦）三月三日の浜降りの日に演じられるようになった。<sup>(2)</sup>」と記されているように、最初は毎年旧暦八月十七日に催されていたが、その後、旧暦三月三日に行われるようになったという。また、開催日の変更に関して、「事例5」の末尾で語られているように、かつて五月にスンサーミーを行ったことがあったが、若者が続けて亡くなったので三月三日に戻したことがあったそうである。

また、スンサーミーの拝みは、もともとは我如古地区のムートウヤー（元家）の男性が御願を行っていたということであるが、十年程前にその男性が亡くなってから、現在は自治会長が中心になって、我如古の婦人会の役員と一緒に御願を行っているという。我如古地区の聖地と御願について『宜野湾市史第五巻』には「部落の聖地は、根所火の神・我如古グスク・グスクガー・ウブガー・我如古ヒージャーガー・トゥン・地頭火の神・前（メー）ヌカーである。三月三日の行事の拝みも前記の順序で現在も盛大に催される。／昔、四祭（二月・三月・五月・六月の各ウマチー）の時には、宜野湾ノロが馬に乗ってきて、トゥンの前で降りた。どのような意味があるのか知らないが、ノロは、拝みの前にトゥンの庭で七回廻り、また帰りにはその逆廻りを七回したという。<sup>(2)</sup>」と記されている。現在でも、スンサーミーの御願は「根所火の神・我如古グスク・グスクガー・ウブガー・我如古ヒージャーガー・トゥン・地頭火の神・前（メー）ヌカー」の順に行われているという。この記述で注目されるのが、かつては宜野湾ノロが馬に乗ってきて御願をしていたという部分である。スンサーミーの御願をはじめ我如古地区の御願はすべて、屋号・新垣（アラカチ）の火神（ヒノカン）から始まるということであるが、「屋号新垣は根屋といわれ、浦添安波茶から来たという。その祖

が我如古大主だという<sup>(28)</sup>と伝承されていることや、〈事例5〉のところ  
でみたように我如古大主の祠の南側に根所である屋号新垣の神墓がかつ  
てあったということから、我如古地区の御願はかつては宜野湾ノロが行  
い、ノロの不在とともに我如古地区の根所（ニードウクル。根屋（ニー  
ヤ）とも。村落の草分けの家）である屋号新垣の人々が担うようになっ  
たと推定される。おそらく、我如古地区成立の当初より、村落の草分け  
の家である屋号新垣の人々は何らかの形で我如古地区の御願に関わっ  
たと推定されるが、詳細は不明である。

スンスーミーは、サンガチャー、三月うるい（踊り）、ウスデークと  
も呼ばれており、戦前は「我如古平松」の下遊び庭（アシビナー）で  
行われ、戦後は我如古公民館で行われているという。女性たちが広場の  
片隅に一列に並び、三味線の音につれて歩みだし、円を描きながら踊り  
始める。時間は四十分位ということであるが、〈事例7〉の話者が参加  
した昭和時代初期は午後三時頃から二、三時間踊ったという。スンスー  
ミー踊りは、スンスーミー（四竹）、スラーキー踊り、ナチデンヌー、  
イニシリ節、ナーク節、クスブンギー、テンヌブリー節の七種目から構  
成されているという<sup>(29)</sup>。

なお、平成十四年三月三日、宜野湾市民会館で、創作市民劇「我如古  
スンスーミー」が演じられた。多くの我如古区民が出演し、活況を呈し  
たということである。時代とともに形を変えながらも、我如古地区で現  
在も力強く生き続けているスンスーミーの伝承の力の大きさを証明する  
出来事といえよう。

## 結 語

以上で、察度王統の始祖察度の子孫をめぐる伝説とそれをめぐる諸問  
題についての筆者なりの考察を終えることとする。在位時に多くの業績  
を残した察度も晩年には権勢におごる心が生じたというが、察度の世子  
武寧は父の死後即位してから日夜気ままに遊び暮らし、尚思紹・尚巴志  
父子に滅ぼされたという。結局、察度王統は二代五十余年で滅びてし  
まった。

琉球の正史には、武寧は罪を謝して隠遁し、その足跡も没年も伝わっ  
ていないと記してあるが、興味深いことに、宜野湾市我如古地区には、  
「武寧王の三男」だとされる「我如古大主」をめぐる伝説が伝えられて  
いる。土地の伝承では、我如古大主は我如古グスクを築城し、その築城  
の際のお祝いの踊りが「我如古スンスーミー」であったという。我如古  
地区の伝承では、未婚の女性たちが輪になって踊る我如古スンスーミー  
は、数百年間続いていたということである。古文獻に記述がないことか  
ら、我如古大主と我如古スンスーミーの伝承は、これまで正式に取り上  
げられることはなかった。しかし、察度王統が滅びても、察度王ゆかり  
の地であった現在の宜野湾市周辺地域においては、察度の父親奥間大親  
と天女が出会った「森の川」、察度の住居跡「黄金宮」、察度の子の武寧  
の三男だとされる我如古大主の住居跡「我如古グスク」と築城のお祝い  
の踊り「我如古スンスーミー」など、数百年の時を経て始祖伝説が語り  
続けられてきている。かつては宜野湾ノロが馬に乗って我如古地区の御  
願に来ていたことも、察度王統と我如古地区の関わりの問題を考える手  
がかりになるように考えられる。関連資料が全くないため事実関係は不

明であるが、我如古地区に伝えられてきた我如古大主をめぐる種々の伝承は、祭度王統の基盤の問題を考えるうえで、極めて重要な事例といえるよう。

祭度王統に関して論じ残した、真志喜の奥間家（佐喜真家）と奥間カシヤ（鍛冶屋）をめぐる問題等については、別稿に譲ることとした。

# 〈注〉

- (1) 沖縄県宜野湾市を中心とした祭度王関係の調査は、平成十三年（二〇〇一）八月・同年十二月・平成十四年（二〇〇二）三月に行った。琉球の歴代王統の始祖伝説に関しては、拙稿「屋蔵大主と鮫川大主―第一尚氏始祖伝説を中心に―」（奄美・沖縄民間文芸研究）第十七号、一九九四・7）・「琉球王朝始祖伝説―第二尚氏尚円王を中心に―」（説話・伝承学）第八号、二〇〇〇・4）・「奥間大親と祭度王―琉球王朝始祖伝説をめぐる―」（福田晃氏監修『伝承文化の展望―日本の民俗・古典・芸能―』三弥井書店・二〇〇三所収）、参照。
- (2) 注1の拙稿「奥間大親と祭度王―琉球王朝始祖伝説をめぐる―」。
- (3) 鎌倉芳太郎氏『沖縄文化の遺宝』（岩波書店・一九八二）、第二部第三章「五 真志喜奥間神座」の項。「鎌倉芳太郎ノート」（ノート番号13）所収『元祖之由来記』。
- (4) 伊波普猷氏他編『琉球史料叢書 第五』（井上書房・一九六二）、三五～三六頁。

- (5) 注4の『琉球史料叢書 第五』、三六頁。
- (6) 伊波普猷氏他編『琉球史料叢書 第四』（井上書房・一九六二）、四五～四八頁。

(7) 話者は沖縄県宜野湾市真志喜の呉屋真栄さん（T15・6・25）。平成十四年（二〇〇二）三月十六日・原田調査、採集稿。

(8) 真境名安興氏「備忘録第十二巻」の「一一 祭度王の子孫」の項（『真境名安興全集第三巻』ロマン書房本店・一九九三、一〇九頁）。

(9) 東恩納寛惇氏『南島風土記』の宜野湾村「我如古」の項（『東恩納寛惇全集7』第一書房・一九八〇、六〇八頁）。

(10) 「我如古区公民館（学習等供用施設）落成記念誌」（宜野湾市我如古区自治会・一九八七）、「我如古区の生いたちと変遷」の項、三三頁。

(11) 話者は沖縄県宜野湾市我如古の島袋カメさん（T5・5・16）。平成十三年（二〇〇一）十二月十日・原田調査、採集稿。

(12) 『宜野湾市史第一巻』（宜野湾市教育委員会・一九九四）、一五四頁。

(13) (14) 『宜野湾市史第五巻』（宜野湾市・一九八五）、「我如古スグク」の項、三〇七頁。

(15) 注10の『我如古区公民館（学習等供用施設）落成記念誌』、「我如古区の生いたちと変遷」の項、三三頁。

(16) 『ぎのわんの文化財「第六版」』（宜野湾市教育委員会・文化課、二〇〇一）、「我如古スグサーミ」、市指定無形民俗文化財」の項、五二～五三頁。

- (17) 話者は沖縄県宜野湾市我如古の翁長ヒロ子さん (S29・6・25)。平成十三年 (二〇〇一) 十二月十日・原田調査、採集稿。
- (18) 話者は注11の島袋カメさん。平成十三年 (二〇〇一) 十二月十日・原田調査、採集稿。
- (19) 注13の『宜野湾市史第五巻』、「我如古部落」の「主な年中行事」の項、四七頁。
- (20) 話者は注17の翁長ヒロ子さん。平成十三年 (二〇〇一) 十二月十日・原田調査、採集稿。
- (21) 注10の『我如古区公民館 (学習等供用施設) 落成記念誌』、「我如古スンサーミー踊り」の項、三七頁。
- (22) 注13の『宜野湾市史第五巻』、「我如古」の「我如古ヒージャーガー」の項、三〇七―三〇九頁。
- (23) 注13の『宜野湾市史第五巻』、「我如古部落」の「宗家と苗字」の項、四五頁。
- (24) 注10の『我如古区公民館 (学習等供用施設) 落成記念誌』、「我如古スンサーミー踊り」の項。また、同項目に、スンサーミー踊りの服装及び小道具として「①スンサーミー (四竹踊り) 全員で踊る。服装はキーチリー (カスリ)。昔はその上からウワーボーイを着けていた。帯はメンサー、小道具は四竹、伴奏は三味線、太鼓。／②スラーキー踊り 人員、服装はスンサーミーと同じ。小道具なし、伴奏は三味線、太鼓。／③ナチゲンヌー 人員、服装はスンサーミーと同じ。小道具なし、伴奏は三味線と太鼓。／④イニシリ節 人員は7名。服装はフロシキをかぶる。男装者はわらナワでハチマキする。女2人はナワを十字にからませてウスを引くまねをする。

他の女2人は、1人はユイを持ち、もみがらをとばすしぐさをする。1人はうちわを持っている。男装3人、1人は小道具ガツパヤー (カカジヤー) 持つ。1人はクバオーギを持ち、1人はカラカラを持って出る。この踊りは豊作の喜びを表現したものである。／⑤ナーク節 全員で踊る。服装はキーチリー、小道具なし、伴奏は三味線、丸 (太カ) 鼓。／⑥クヌブンギー 人員4人、服装はキーチリー、小道具、扇子2本、小太鼓 (チゲミ) 2個、伴奏は三味線と太鼓／⑦テンヌブリー節 人員1人、服装はキーチリー、小道具、扇子2本、伴奏は三味線、太鼓。」(三七―三八頁) と記されている。

〔付記〕沖縄県宜野湾市での調査では、宜野湾市教育委員会の上原禮子さん、我如古区公民館の平良眞一さん・翁長ヒロ子さんに大変お世話になった。記して感謝申し上げます。

本稿は、日本学術振興会平成13年度・14年度科学研究費・基盤研究C・研究課題「南西諸島における英雄伝説の調査研究」の成果の一部である。

(二〇〇二年十一月一日受理)